

• 0 1 2 2<sup>1</sup><sub>m</sub> 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 JAPAN

13  
1303  
9

梅之南水卷之三

東都

南仙笑楚滿人編述

第拾五韵

怨鬼再苦讐

蓑文太さがわ小紫こあじ詞何ごとかりん疑ぎがこしけまバ庭ば院いんひいと拵そなす  
寢ねひいふ赤あかの遣おはし權ごんハよ操さる立たて二に重じゆうの室しつを安やすくくす  
乃の猶よ仕し損そんぐくうと蜜みつの爰いと迎むかく豫よて交かまる惡あく棍こんども  
四五ご輩ひをままねき今いま霄そら云いの緯いうまバ喧けん嘒ひの緯いうませ手て四よ兵へい衛えい  
權ごんハが飯路めんろ又また待伏まつぶあ裂さして妹いもが仇あわよむ且よハ我わが寢覺ね覚おと安やすく  
きてきてよよと言いふふくらくらて其その方がの蜜みつよよ隱家いんけとそ立た飯めんつつの斯この  
立たききすす手て四よ兵へい衛えいハ這由なづとと小梅こめいみみ告こ初はじを又また浦屋うらやの長なが

木下春水後卷之三  
小燈打こだうちん  
ふす語ごつまく後のち。ともうみをせばへと監あらひでしと小燈打こだうちん。  
堤傳つつみひと駆くりくると侍しのわけわる。固いさむが部べ下したの西黨せいとうをまとどきす  
より物ものをもりよらず。突當つまきうと序じゆあくとよ四兵衛よしんえのと。そもう  
赦ゆるゆるくと誰だりへりんとする体からだよ。惡漢おきかん等などハ裳きぬをとくへ什麼なに夜  
道みちうきバとて桃燈とうとうを携おぎ。さーもふ廣ひろき這堤まづふく人ひとよ  
突當つまきうと奇怪きかいなり。狹へばかくままハ頭巾かぶとじんと冠かぶりうごら我われへ接授せつじゅ  
きの不禮ふれいめ極きわ。あやまちとあくべ不簡ふかんせまじたふもあくしれ  
その裁さいのくら波巾はなわじんを脱ぬぐ。走はしきバ赦ゆるく  
く急いそくもどりよへ正まさく。因いんひぐとトの者ものと立たせずたく。急いそく  
げばる。かけ言いわせ接せつたやとよ四兵衛よしんえが太正たいぜいのふす各方まちまちへ接授せつじゅ

もとふ面巾おもてを着きみだらせ。甚ごんふ礼れいよ。次つぎは深ふかき  
細ほそあり。在あげくゆき。と。り。ど。す。き。く。ね。破落はりちら戸戸。と。き。う。を。倒たせ  
ひり。ひり。迷まよく。接連せつれんく。斬きく。ま。が。よ。四兵衛よしんえ其その身みを告さけと。と。く  
敵持てきぢの。臂ひと。古哥こか。れ。い。と。こ。く。る。接巾せつじん誓ちかうの。意い。彼かれ。ね。が。  
きの時節ときせつの。比喩ひゆの。比喩ひゆの。は。宣あらわす。よ。汝な。因いんひ。が。部べ下したの。奴やつ。と  
見みく。六。經きよ。目め。誓ちかうを。破はら。う。へ。く。く。這はす。四。兵。衛。が。太。正。の。ふ。す。各。方。へ。接。授。  
初はじの。旅衣りょい。黄泉こうせんの。旅たびへ。う。せ。ち。ま。と。片かた。も。よ。預よ巾じん。う。う。じ。う。接。裳しよう。  
を。せ。も。く。仁。玉。立。物。み。い。そ。せ。ふ。お。殺。せ。と。惡。漢。ど。す。が。四。方。う。う。  
斯このく。か。る。折おり。も。あ。と。凶。う。ふ。便びん。あ。る。意い。が。崖が。の。俄に。の。驛驛。子。よ。あ  
ま。ま。ま。久。久。を。ち。く。一。船ふね。み。戰たたか。い。と。が。り。う。じ。う。よ。四。兵。衛。が。太。刀。半。

又。此日散に逃げて岸も波の音のみつけまば。午四兵衛も  
放く戦をこのまぢまぢ急ぎ。我家よ立候り。小梅ふす。云々のうを  
物語は。浦屋より「五十を解よ告げ。跡の古文うへど執事  
そてぬ。這時因ひを遠止くあらざる」。うど小紫が見よ代りて逸  
たう志よ感ド。一旦ハ見遙せしものうべ。斯く困也。何と毎え  
底亂味ゆくや有けん。何国へ逃げけること。却説唐琴。うなび  
袖衣ハ病よくうど。妻。主人龍次郎が供せてとうひいね。かく武  
藏。うる葛飾。よき飯り。父源兵房が危みとさ。むろ。かく日を遙り  
ま。或日父源兵房の妻。うり飯り來り。袖衣は向ひゆ。今日  
ちよ鶴の風流と妻の意が窪の廓にて晴れあつて其女の名を案

と女らん。又男の名ハ推ハとりよとく。尚や娘あらへ。うざふ。う  
廣き廓の工。に谷も參へ。あるへけ生。何とみらん。内  
動といひ今朝の鳥。をよくま。加え。ま。龍次郎。老。桂  
ハと仮名あり。一。坐つるが。被くらひ。是と。いり。うた世の同  
貌。内。み。そ。案。居。ら。そ。ス。キ。う。一。モ。桂。従。ま。の。黒。  
き。絆。一。奉。へ。と。り。よ。袖。衣。ハ。よ。一。モ。桂。従。ま。の。黒。  
し。あ。ま。ハ。う。の。上。か。う。の。是。不。見。キ。モ。う。の。元。も。  
り。で。よ。・  
り。・  
り。・  
と。こ。か。入。ま。キ。

是別入まあくす主人龜次

（是別入まあくす主人龜次）

且致ひに上座よ押直し。今も足立まくせ。

やくわく。空向うをみてや。さぬで遠くもあり、

業よりあらがひとひ。袖助いふくにまかに表す。徑て邊

邊と脚と夏。うみひをひよらへ、手へこむ。備や。

三月日とまはせが。

今日も角り風流ひよからむ夏。まくらが。

まくらと風ひて呼へ。手四を陽ひ

三と

手ふ

まくらぬ内側と絆く。老の氣びひとふ

おと山

手ふ

龍次郎も最面うく。何とりへき短く。さてうむ。ふるを。

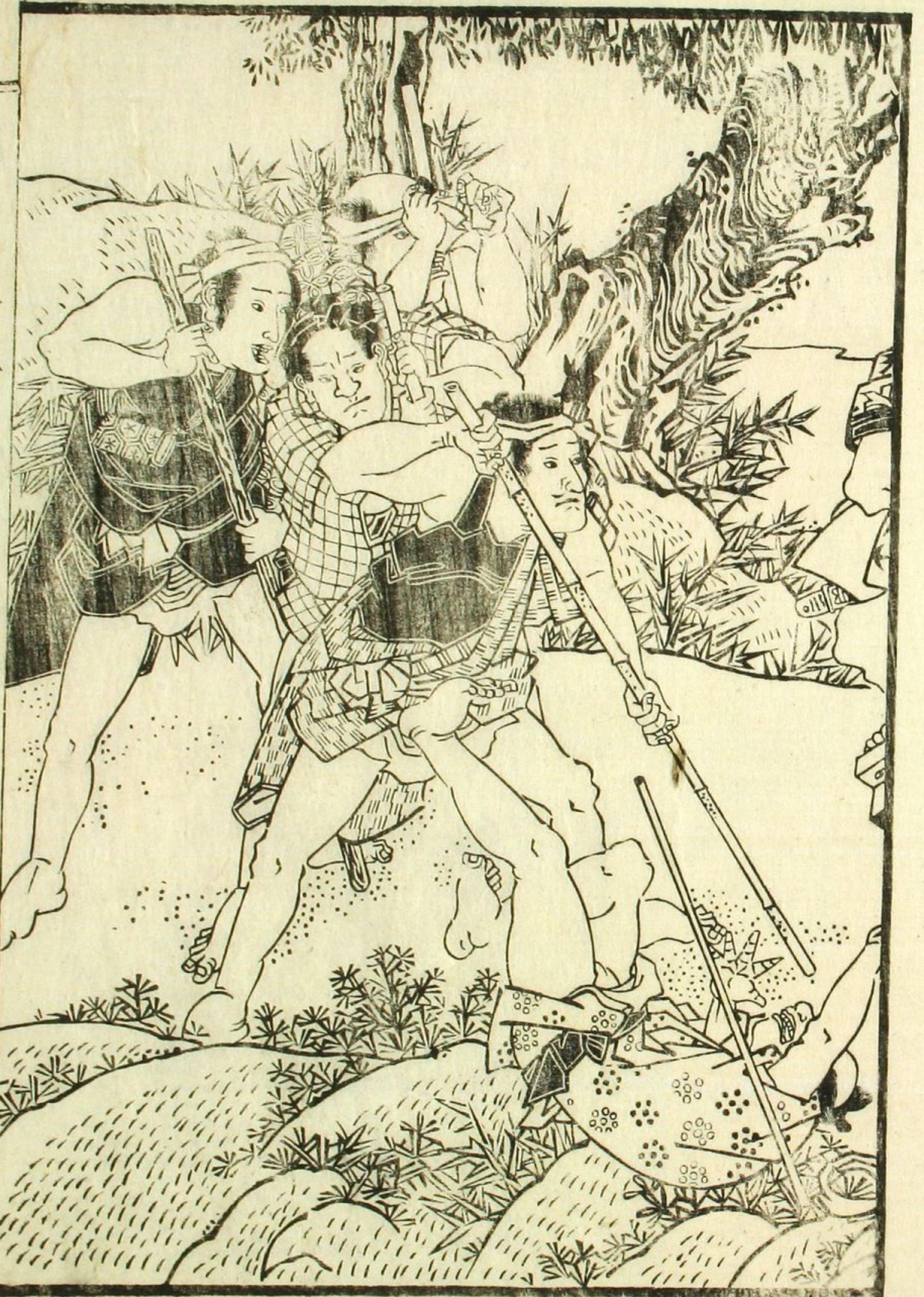
源三湯川更よ氣もつづす。龍次郎君の斯く安自ゆ

うせまとう。

定らく娘山紫もつかひのうべ。世ふ苦涼不ど偽りとすのうべ。  
街の間も胸を痛やへこそ易りうね。さていは三の形のうれ縛の言  
ひのうまで。一大虚をほへく。あ大實をほへとから。針などある  
まも捧げよりか。世のうらひ。曲輪ふく情死せて契情ふても  
有へやと。向そつらまふ三箇ハ。胸もうちさく憂やひ。手四を湯川  
洞をたらひ。源三湯袖冬よお向ひ言ひ止むべき。掌うねば。縛の  
子細百地よ物語つとたぐらう。りふも街の道ふ遠ひて。山紫どう  
ごと。權八といへ人と情死して相思うり。故ふ驪山遙月寺とりよ  
蘭若よ両箇が瓦聚を埋葬し。比翼塚と名づけく。赤の世までも  
煙えり。又まよる貞女の境墨くぬ掘とせの人ふあくせとせ。緯

のうと告げたり。せとてその爲め、然て三箇が道ある。うまと。山房の  
教きを受ひやり。速かにりべつをすまざら。黙止たる。毛利潤を率也  
故うまば必限みゆくよと聞く。源義高置をひそめ。こへいひぬる  
を義高のうみ。權ハとくこまふあとは、蘆次郎君の候より名をかり  
てあくすや。加之小案さう頃も、蘆次郎君の案の情は  
あつうる。風よ波も、そきよあくで外よ又權ハといふ男  
ありて。そまと供儀清死せし。尼わげをしてる人非人ひつふ。網羅は  
あづめばどくひままで網羅の方といひうなしてしもと。老の一つうロ  
暗一泪をちらくと。拳とふきる源義高が。洞と吹くと四扇の簾  
の子細を知る。左のねど全く異入。權

とりの人ありて。まと情死せし。大根ぞ。權ハとく蘆次郎君の世を  
ゆふ假の名をす。小案が死せし。ハ云々の証ありて。蘆次郎の  
見舞す。たゞきのま方始をりべ箇様々終をりべ云々。  
父案が実父ハ高階師直とす。津の国武庫川よ亡失する。夜  
日平次をうとりへる者。やと歟。蓑文太と兄まつる。腹の患  
ふくはまよ立てる上ハ。とてよ前次郎君とまゆふ。又腕の患  
足まつて死である。とよ。征招。游次郎君の世をすか。一日の晴  
よ百年の命をす。赤茶の縁をむすびく。とけさせ。最も  
そまの義高。次郎君もいと不似よ。當時のまひ。四聲を切掛ひ。小  
糸うな縫と。俱よ。身縫ある。逸月。支。義高と比翼縫と。りて縫を



集ま。小紫ハ推<sup>シ</sup>と清丸せしと世ふくことる。歎よひをあき  
さう。深きや氣のうす死ありと相と俱<sup>シ</sup>は物語<sup>シ</sup>ハ源義房袖<sup>ス</sup>  
悲歌の酒<sup>ス</sup>むせびうぢら。源次郎<sup>ト</sup>四三房<sup>ガ</sup>厚情<sup>シ</sup>感<sup>ム</sup>けり。四  
三房再び源義房袖<sup>ス</sup>向ひりゆかう其時真<sup>マ</sup>蓑文太<sup>ヲ</sup>すゑる  
べうり。よまと。小紫<sup>ト</sup>、情わく。竊<sup>シ</sup>發<sup>シ</sup>四郎<sup>の</sup>刀<sup>ヲ</sup>冰姿鏡<sup>二種</sup>の  
室<sup>アリ</sup>。び源次郎君<sup>の</sup>門<sup>モ</sup>入<sup>フ</sup>。全く小紫<sup>が</sup>勤効<sup>シ</sup>。とば。  
猶<sup>シ</sup>、ざわど蓑文太<sup>の</sup>命<sup>ヲ</sup>取<sup>フ</sup>。せぎ<sup>ト</sup>そろ寝<sup>ル</sup>の<sup>シ</sup>せ<sup>ト</sup>。彼<sup>ヲ</sup>  
何<sup>ノ</sup>國<sup>ヘ</sup>遷<sup>シ</sup>。よと下<sup>ニ</sup>遠<sup>キ</sup>も去<sup>フ</sup>。ゆきの<sup>シ</sup>邊<sup>ニ</sup>徘徊<sup>シ</sup>。  
桂<sup>ヨ</sup>告<sup>フ</sup>者<sup>アリ</sup>。今宵<sup>ハ</sup>月<sup>ノ</sup>霞<sup>アリ</sup>。霞<sup>ニ</sup>次<sup>サ</sup>候<sup>カ</sup>。とぞ<sup>モ</sup>聞<sup>ク</sup>  
立<sup>シ</sup>。訊<sup>フ</sup>。小紫<sup>ど</sup>締<sup>セ</sup>縛<sup>リ</sup>。且<sup>ハ</sup>袖<sup>ス</sup>病氣<sup>モ</sup>妨<sup>ヒ</sup>。即<sup>ハ</sup>ぐ

間<sup>アリ</sup>。屏<sup>ス</sup>又<sup>ハ</sup>歎<sup>シ</sup>。歎<sup>シ</sup>の行<sup>事</sup>をうげねんと山梅<sup>リ</sup>うどす來<sup>リ</sup>。と。  
子細<sup>シ</sup>つづき<sup>シ</sup>。告<sup>フ</sup>て。觸<sup>ミ</sup>け<sup>シ</sup>。ハ源義房<sup>ハ</sup>一箇<sup>ス</sup>もあ<sup>リ</sup>。何<sup>が</sup>  
借<sup>シ</sup>袖<sup>ス</sup>。と。り。し。山紫<sup>アリ</sup>。と。り。し。一方<sup>ヲ</sup>。ぬ<sup>セ</sup>。あ<sup>リ</sup>。唐寧<sup>の</sup>面<sup>アリ</sup>  
り。と。蒙<sup>ス</sup>。の。う。る。見<sup>ハ</sup>。り。う。す。で。す。此<sup>象</sup>。又<sup>止</sup>。永<sup>く</sup>。歎<sup>シ</sup>の行<sup>事</sup>を。探<sup>シ</sup>。と。  
う。と。り。と。信<sup>シ</sup>。う。ふ。管<sup>侍</sup>。ふ。そ。源<sup>次</sup>郎<sup>ト</sup>。四<sup>三</sup>房<sup>マ</sup>。屏<sup>ハ</sup>大<sup>き</sup>。お<sup>お</sup>び。  
こ<sup>そ</sup>り。と。て。源<sup>義</sup>房<sup>が</sup>方<sup>アリ</sup>。と。て。日<sup>暮</sup>。み<sup>え</sup>。と。つ。み<sup>え</sup>。粧<sup>シ</sup>。と。か<sup>ヘ</sup>。  
蓑<sup>文</sup>太<sup>アリ</sup>。が<sup>シ</sup>。心<sup>ト</sup>さ<sup>シ</sup>。と。さ<sup>シ</sup>。と。め<sup>ケ</sup>。ま<sup>リ</sup>。備<sup>ウ</sup>。む<sup>ち</sup>。因<sup>ム</sup>。の。蓑<sup>文</sup>太<sup>アリ</sup>。  
其<sup>後</sup>。ハ<sup>麻</sup>。へ<sup>モ</sup>。袖<sup>ス</sup>。と。審<sup>シ</sup>。よ<sup>レ</sup>。居<sup>ム</sup>。と。世<sup>の</sup>。う。と。う。四<sup>三</sup>房<sup>アリ</sup>。  
源<sup>義</sup>房<sup>次</sup>郎<sup>アリ</sup>。何<sup>ノ</sup>國<sup>ヘ</sup>。往<sup>カ</sup>。や。け。辺<sup>リ</sup>。ふ。く。と。う。け。ぞ。う。け。ぞ。う。け。ぞ。備<sup>ウ</sup>。  
我<sup>形</sup>。を。隠<sup>シ</sup>。と。ま<sup>ス</sup>。が<sup>シ</sup>。遠<sup>国</sup>。と。も。行<sup>カ</sup>。や。と。當<sup>世</sup>。を。立<sup>退</sup>。ま<sup>ス</sup>。と。り。の。き。

ベーとお飲ひ甚後ハ彼所宴ふ多び居て多般の悪事をやで  
けりが否も美也夜も又（よも）棧（さく）が怨靈宿（あらわ）。蓑文太を  
售（めぐら）と白眼（しらまな）をやへ蓑文太は年頃放（はなぶ）をやるもたゞ小席の重宝  
冰姿（ひき）を所持せしゆゑうり華うつうの放（はなぶ）が深山に秦唐琴瑟（きんぜき）  
郎（らう）の様（さま）とぞ。名刀と宝鏡（ほうきょう）をたゞうり取（と）く歎次郎（たんじらう）是  
生（う）べ今（いま）は物（もの）け見（み）るゝ遙（とほ）其方（そのかた）と取（と）く殺（さむ）。吾  
妻（こなれ）年（うと）の鬱念（うくねん）とぞすべと或ひに近きあるひ。如ひ昼夜（よとよとす  
日（ひ）よせくぎりて暫（いわせ）も寐（ね）せよ又或時（とき）に怒（いの）りて萬身（まんじん）へ喰  
つききどきぬくよろがよせとまで更（さら）より余人の目（め）へ見（み）せ。蓑文  
太（ふと）が眼（の）耳（みみ）と苦（くる）も更（さら）に取（と）く。竟ふ彼の亡靈（むうれい）が食

付（つづ）と覚（おさ）へ一跡（しき）も瘡（うき）を発（あ）。次第に腐（く）りて。あくらも瘡痍（うきよ）の如く。  
その痛み経（ゆ）へどて。其の藤（とう）のたの怨魂（おんこん）金龜（きんさい）も着（き）て持（も）苦  
あらふふ露（あらわ）ふをす。さるく医療（いりょう）をと尼せどりて草根木（くさねぎ）  
をそぶ死（し）うんや後（のち）。実の麻病（まびょう）となり。昔の体（からだ）へかゝるく。  
更（さら）より世の人とす田工（たうこう）す。かつてけり。蓑文太（ふと）ハ憂憂（うう）にかひ  
けり。とす。歎持（かんじ）の二ふ處（ふしょ）百體の寢（ね）たるハ。ひづけの幸ひうり。  
寧（ひぢう）々歡（かん）び居（ゐ）てり。出（で）て部下（ぶげ）の小賊（こくせき）も指撻（さしつき）して福有（ふくあり）の家  
こみ入せ。金銀財物を掘（く）らとらせける程（ほど）。何不思議（え）く歡喜よ  
せを送りける。ひづけの故（ゆゑ）や蓑文太癪病（ゆうびょう）となり。後（のち）ハ撫（な

怨夫もまじはず。さうで痛々せざつせきば。足ふくたぢのま  
よきと。そもそも江戸上を西がまよひ。返り便りと其後ハ治癒  
も加へど。そひに促すとす捨ちきよけよど。辭次郎子四吉房木  
世小存命とあらん限りへ替へ吾が相恤の要りへてとも枕を  
高ふして寐難し。よく渠等が在家をさへ來らむ。寝よどぎ  
卫そ般へ。右股の病ひを除くまあづと部下又言えり。もどら其行  
あを拂へ。あらけり。或日一人の小城蓑文太又肉ひ。今日もあづすも  
萬飾の辺りふく。彼の子四吉房を見しき。且つのく往とく  
どその在處と見届へふきのふゆて内五六小梅嶺次郎も居す。據  
す。うと洋又告うわざ。蓑文太は大きみ珍び。審す失そものと

其をぞもぞりへける。

第拾六齒

孝子建本懷

署。す。四吉房次郎。亦。一旦ハ義みよろく。蓑文太を見廻せ。一つち。  
さぬくよ其行あを拂へ。求ふと雖。ふつよ容をも。見けるモ理うる哉。蓑  
文太ハ怨魂のゐに相貞のうきり。すまうとバ。途中ふくら。や。面分  
か。す。と。すりそ。蓑文太。ども困。と。も。織入あく。ん。や。かう。り。け。兵。子。四吉房  
篠。身。れ。あく。み。或。日。篠。次。郎。よ。向。ひ。や。け。よ。斯。く。日。毎。よ。遠。道。を。拂。回。て  
蓑文太。る。行。柔。と。孫。せ。と。お。き。る。く。當。地。や。居。く。さ。か。と。見。く。す。それ。せ。り  
ま。う。當。地。と。身。わ。て。ハ。勞。と。功。ま。ー。私。ま。ハ。幸。ひ。用。す。も。あ。き。ハ。篠。食。う  
い。つ。さ。き。あ。て。あ。ら。あ。ー。休。豆。お。擇。の。間。よ。替。く。是。さ。と。あ。き。デ。ベ。ヤ。ー。篠。食。ハ。篠。房。の。地。あ。ま。が

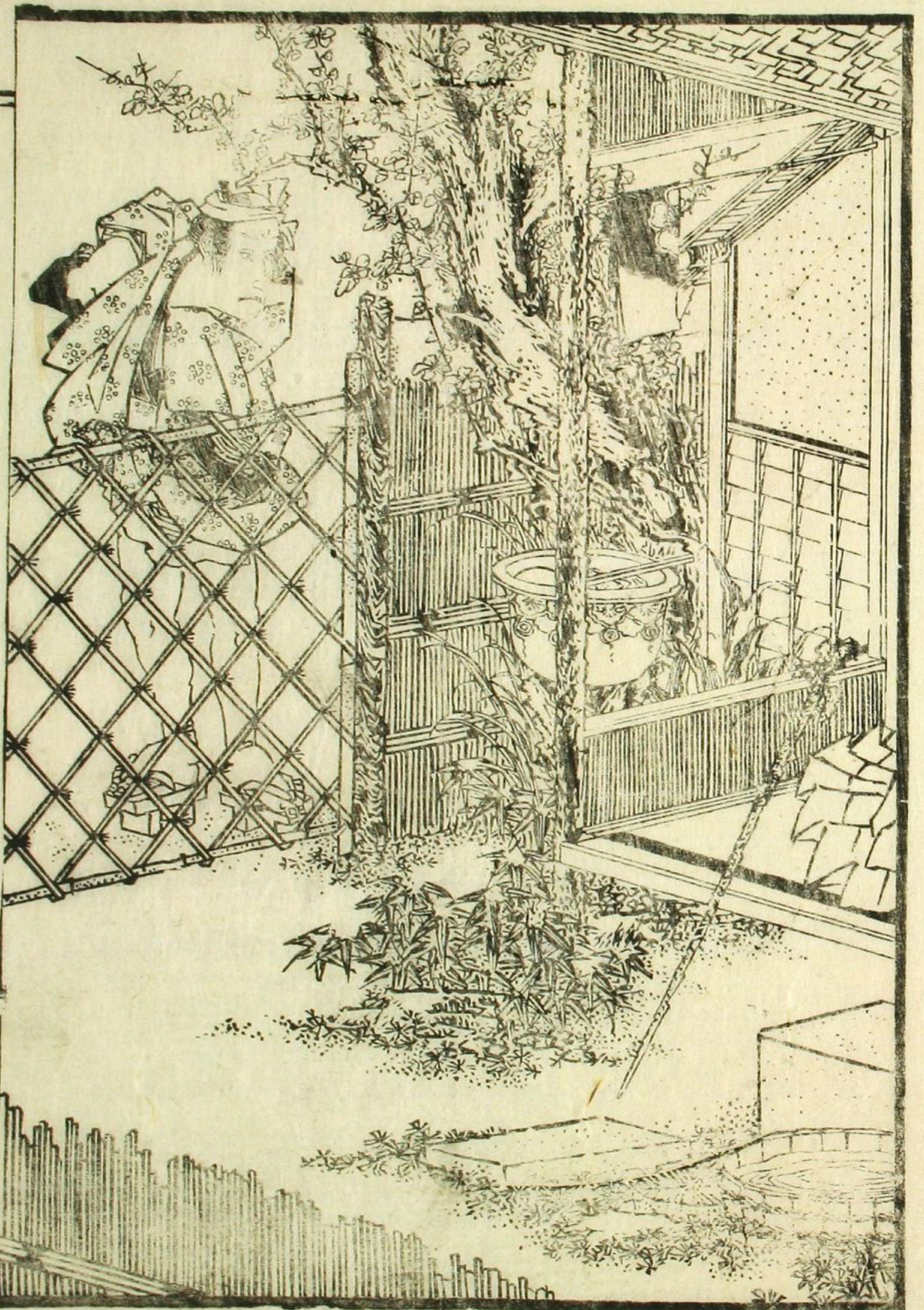
蓑文太医と居て便りよを享すある。彼地はあくまも早う。君  
ふハ尚も當國よりむせつけそきで。その内ふハ袖外の病ひも本服  
まへけきがゆく後袖外と同左。ひび辞よ緒國と見ねり。君  
蓑ふ六本腰と掛けたまことねとりゆべあら。我苗守のうち六本腰  
腰を達み木のす蓑ふもひつげ。必端めがお一もと、斎れてす  
と。腰を達み木のす蓑ふもひつげ。必端めがお一もと、斎れてす  
斯くて苗守ふべ。游次郎袖外小梅源。彦ホハ日毎ふ子四三房が安養  
とすち居て。折し秋の初すて何とろく表すとゆふとじうる  
ス。爰ハ亥が座のいりふべ。但すやうび前ふ六隅田の邊を清く。圓清  
のそえうくまうた。僻地。寂莫とてゆの妻。一夕暮ふ少撫ハ  
鶴次郎又向ひ。今宵ハ足見君浦右門。さゑの。夜。ひかくのよ  
向羊と侍佛の扉も。ひくに杏花の御。表の方よ。亥高。是  
ハ猪国。法場へ六十步。部の太氣が妙興を納め。大須を発起く。  
遠道を看縁とする。表門よ。今宵の宿を取つ。捐ひ。翁美。及  
び。もす。宿。何幸。表門よ。今宵の宿を取つ。捐ひ。翁美。及  
こ。きよ。と。功徳。ハ。と。窓。山あハ。游次郎をかへり。よ  
君。立。ゆ。と。一。ゆ。や。足見君の。達。夜。ふ。書。り。行。暮。くる。日。旅。宿。の  
宿。と。を。ひ。も。ふ。を。無。下。よ。せ。と。精。う。を。よ。ひ。く。と。が。在。く。一。夜。の。き。を  
算。と。ま。つ。も。き。ふ。す。子。細。ハ。あ。く。ド。原。彦。彦。ど。の。ハ。苗。守。る。ぐ。ら。袖  
然。の。奈。る。あ。ら。と。こ。れ。て。袖。外。何。が。ま。て。親。父。ど。の。が。居。ら。す。と。ま。

小子す。夢見る。君の内達夜。旅宿の宿主と。す。幸ひ  
片足のうなづき。名僧か威と。びむへ。遠巻旅番。いふ。す。  
甘ひ。一夜の内宿や。一回向。と。まほ。まほ。かく。の。頃  
ひき。さりと。父お教がざらん。と。まほ。呼び入と。まほ。ま  
小梅。おようご。旅宿。よひ。今宵ハ。爰の内す。さる。がた人の唇  
えあく。りだ。事ひ。ゆゑ。まほ。この代み。何  
まく。今宵の宿。まほ。せん宿。よ。寒く。と。も。一夜を。あ  
まほ。と。切。の。朝。旅宿。も。こまほ。と。ある。廣大。多道の。内差  
き。と。草鞋。と。ソ。と。様。たま。尾。まほ。小梅。ひどろへ。大釜。うす  
湯を。豐。ゆ。ぬ。旅宿。が。か。まほ。さ。一。身。且。と。そ。ぞ。だ。う。と。あ。ざ。

産。お。あ。し。つ。み。ご。小梅。ハ。あ。ま。び。旅宿。よ。お。向。し。今宵。ハ。我。く。が。五。朝。六。  
大。あ。う。け。四。主。入。の。四。日。よ。當。り。そ。べ。五。日。何。卒。と。う。と。一。回向。て。ま  
ま。と。頽。む。よ。旅宿。あ。と。是。何。か。猪。回向。ハ。半。宿。の。復。日。よ。五。日。旅  
う。と。も。斯。く。一。夜。の。四。報。赦。よ。頽。る。う。ハ。念。ほ。よ。ま。の。ま。せ。と。ま  
り。と。ま。赤。年。の。人。ま。う。ふ。四。君。の。食。日。う。つ。と。く。旅宿。と。ま  
や。回向。と。せん。と。六。氣。ぐ。く。と。も。夜。と。と。も。四。間。よ。旅。宿。と。志。入。の。冥  
福。を。い。の。ろ。べ。と。ひ。き。佛。間。一。半。宿。ち。ま。と。ひ。よ。山。梅。ハ。む。ぬ。く。ま  
ら。が。は。三。回。回向。と。て。る。ま。く。と。そ。間。よ。夕。飯。の。り。と。て。ほ。ま  
ま。ひ。だ。う。つ。義。と。ま。じ。と。せ。ん。と。ゆ。と。と。義。禪。か。あ。り。く。納。戸。の  
ま。も。あ。う。の。ま。う。か。と。旅。宿。ハ。貧。と。貧。子。の。宿。と。押。率。山。梅。と。宿。よ

一ト間よへづね。やがて小梅ハ納戸を出りてゐる。今日ハ源義安  
も例ふうたぬのむとさ。源義安は四月崩る。今日う明日ハ善應を  
ヨ一食ハ飯りあり。日限うふ。とまむ後つのうかとりへり。りつゆる  
みや。いよいよ夏のこゝり。かる時の憂鬱を拂ふ。或時幕酒といふのよ  
生れ夏あらう。幸ひ旅僧も泊つてひくま。一ト走り村代酒肆へ  
りそとふやどよ袖交じのと只二入公卿くわからん。當宇へ  
とりひき。小梅ハ忙びしく走りさす。ぬぬぬ。あと二入ハ額とあらえ。  
りゆう歎とあらせ。目知度左衛門へ錦とかぎ。本領安堵する夏ぞ。  
猶々我へ運搬く。蓑文太がゐる返り討ふせんと。うせばうせんと。  
蓑文太が病死する夏むね。我が一重埋木の花塚をよろこひの上

冥土の凡へほとうりよ。只一刻も迷く。蓑文太をあき一種諸とも本  
貫へ積みて。あてび唐琴の家を起したきの哉と。あくまゆひと  
様かきて立去る体。の隠て郎へ何す。みやとのびあつて刃とてあれ。  
見るもひせた一箇の麻病を車にあせく。家の内の邊りよけま  
たるふくぞありけり。次郎へとまく。ある旅猿いや宿世あ  
あくしてうち業病よ苦。むを食。さて後あくやあらん。ざりえ。  
うかく。きふち。うかく。きふち。うかく。きふち。うかく。きふち。  
金毬。外面持。のと食。ひ。今晩ハ我志日うまた。ことを  
きのうもと。おととす。顔とを食いつぐ。お筋の双眼の泪と



浮め。内房ハ唐琴。龍也耶。ぬくよして。さのう頃。廻と飯。回まひ。比  
權ハと替名をあひて。人ふあくをやとり。よ。戲次郎。ハ大。よ。縁。に。  
委。と。き。の。を。か。る。ハ。つ。も。よ。う。す。奈。ほ。ふ。す。游。次。郎。と。の。の。  
う。ぶ。去。る。頃。ハ。子。細。ち。く。權。ハ。と。寝。寝。や。く。う。しが。む。体。ハ。何。人。は  
あ。て。か。う。委。と。き。工。を。か。り。す。や。彼。の。片。廻。山。は。餓。ぐ。る。人の。こ。ひ  
う。う。そ。の。俗。性。と。彼。生。り。と。浩。正。向。へ。ば。食。ハ。い。ふ。く。両。眼。を。ま。く  
だ。き。裏。や。天。網。焼。く。跡。ふ。と。漏。う。ざ。と。こ。ゆ。う。ん。汝。ふ。り。う。の。八  
枚。ふ。う。る。因。果。報。報。の。理。經。べ。き。ふ。あ。く。す。你。も。少。子。ハ。凶。勇。が。仇。と。称  
ら。ひ。の。と。旧。鳥。蓑。丈。太。と。り。の。の。う。り。と。彼。と。警。く。戲。次。郎。蓑。丈。太。  
君。も。落。材。く。か。く。自。ら。名。氣。火。ある。う。ハ。逃。げ。き。る。案。よ。も。あ。く。す。是。て

小。緊。が。掌。か。く。も。綴。り。ひ。つ。ら。う。が。我。父。も。原。う。あ。る。武。士。ふ。く。首。平。次  
左。手。と。り。う。一。者。う。う。う。が。我。ハ。初。か。み。て。丈。母。と。別。正。旌。ふ。と。さ。  
よ。え。其。中。よ。不。國。信。別。ふ。く。内。房。う。見。る。浦。右。エ。門。ど。の。く。令。室。棧。う。  
シ。竈。通。一。妾。蘿。菴。を。殺。一。其。後。笛。吹。峰。ふ。く。兄。浦。右。エ。門。ど。の。を。切  
害。み。く。そ。互。と。う。又。く。諸。国。と。編。金。す。一。房。麻。山。の。誠。ま。と。う。り。或。  
株。桐。柄。組。の。侠。客。と。う。り。岡。公。と。交。名。と。て。曲。輪。を。保。回。く。金。銀。紋。  
宣。と。掠。め。人の。命。を。屠。つ。と。う。幾。人。と。り。へ。數。を。あ。く。す。爰。よ。渺。く  
この。輶。ひ。ま。う。て。々。を。と。く。世。ふ。も。稀。う。る。業。事。病。を。う。け。と。蓑。丈。太。  
ど。も。困。ひ。と。も。見。る。人。う。た。は。廢。我。さ。く。ら。残。猿。く。期。て。ハ。世。ま。存。  
余。う。ひ。う。け。玉。が。日。づ。く。墨。よ。る。ね。來。う。口。房。う。と。う。う。と。を。至。る。

おらばせめく赤糸の苦銀とのまんと原がみびくと巻かれり  
寺とさざれまよての預ひあり。我へ旧き若文太さぶら。かく病の  
ふ回体の變りしゆをおもへりとも誰うありて実の歌蓑文  
太さりとらふやあるべき也。落次郎こそあらぬと食の首をあく。  
歌蓑文太をちゑりするどく上をあきむくとりこれんま身りざ  
原末我病ひハ桂藻院ホの泡裏じゆく業よして冰姿産を腰  
ゆせ。折ハ心魂もあらずから病ひもすりしが彼の口宣をく  
きひく後残カ心冥再び我をうや生ては病ひと巻きてく  
彼の達を以て我惣男を照て。病ひの本核せハ案のうちま  
その時緊く名譽ひて内勇者もあらずハ奈何と言と巧よりひく

むろた不る年ちうる龍次郎をと固ト。ひのうちふぞくへ今歌蓑  
丈太が來りて更に袖外ふ物結る。渠々斐前うまで書まち  
さえうらハ首尾くあきとく後ふく子細を詰り候せて。もとあく内  
み入り大切よ秘ひ。水姿産を取りひて再び外面へ持ゆくと歌  
にこせバ。蓑文太ハ押戴き錦の裏の綴とくく院面り出一惣男と  
て。せハ不る美や今を年経て眠墓の脊も異う。かきみこ  
た。痴病の旭。むづく。墨のどく。曉。よき。と蓑文太。昔の容  
まくつ。まくと。完。と。あひ。あら。峰。や。歌。下。やは。産。を。す  
得。こ。あ。ま。き。く。乞。食。の。容。よ。む。つ。。爰。不。來。と。名。す。の。よ。と。歌。と。む  
お。冰姿産と。度。せ。一。ハ。愚。る。小。童。う。ふ。豫。と。キ。四。三。湯。ハ。我。乃。あ。が

探えと他國にて家をあらうべ。困者となりて終かう内  
小梅と蹇の下部をうきまへ難き恐れと後は遠く  
ヨードスケマラ  
ヨー一鷄姫四郎をも奪ひ返し。一ツより妹少紫ハ故うきにけり  
敵討ハ五分くまとあくまで喰はる。翁よ歎次郎ハ才無り  
あり且蓑文太先達く玉川あくすくうりを少紫う思ふ感して。又  
せしをスのや我をくまでも。姿院とうよおひとす。やう歎をこ  
ひくちゆうを立上りと務負せよと刀の柄を握りつら既み殺を  
むす所を至りて千と遡り一つ踏脚う翁とやじとて。此蓑文太を討  
ひえども虎の聲を極るも因前ちよことさのまごとふみ倒せ。蓑  
とあせきど隸次郎いそゞ強氣の蓑文太なるがへき。既よあやう犯

その所へ折克庚る梅の子四三房。暮昏るをと秋り夜のくま月を燈  
よ。我家より通づき遙くおよび何うよみせハコノねど両箇あらそひ  
居るあつま。被ひろなまをあつた。とよまば歎蓑文太が隸次郎  
を引捕らへ。既ふくよと見ある初松子四三房斯と見るを。既  
かつて蓑文太を引つけ。隸次郎を後ようこひ。除くや汝と宋  
江の名ハ因る蓑文太。うしの敵務負せよと結秦。が蓑文太も  
豫く。子四三房が身休ハあつて。見るを。既とすよとぞ遙きど  
ねく準備やあつり。竹杖もきのみ。一刀を抜もす。赤糞もす  
既と切く。既と受屍。皆いどみ戦の大刀音袖外ハ  
何うよもと蹇きら。門口へいどく足ま。子四三房と隸次郎が歎

蓑文太とひつ取りこみ切縫せきぬがよ。またハ一大事と化すも事。主とみ  
らぬ途方たのく余にせんと氣きをあせる。折不かねおどせや一處いちしょの陸火  
空中そらより飛あま。傳ふ落るよと見うけ。忽要霧すくいゆのぞく。小は景けいが答  
あへ。是袖そでがうろへまほり。衆抱しゆほうするよと見うけ。今とれ歩  
自在じざい。是の立たてと拂はふをうへひのるを業わざすや。したゞめ  
あひこでへ家より納戸のうちとの腰こし。即そち一束いづつ。袖そで加勢かぜ付つ。變かわけろ。がら切きこら。龍次郎子四三鷹りゆうじろうハ無な事ことの  
き。是不審ふしんあり。と寧むかく。然しからもあくせす。いざみ戦たたかひ。の蓑文太三  
方さんぽう歎あはれ。とうけとさてへ。是を見合みあわせとむる。馬藤ばとうの老お小室こむろら  
が幽鬼幻ゆうきげんのどく立たつあく。是と見うけ。是と見うけ。是と見うけ。是と見うけ。蓑文太ハ孫力屋そんりや

貴子瀧次郎きよこたきじろうが刀を玄くわ換か。肩先深あく斬きさげら。あつとがうりに  
倒た伏ふ。是のうへいをも。四三鷹袖りゆうじろうのつうとこりを。是の瀧次郎たきじろうへも  
て首くびとうき切きく立たつ上ある所ところへ小梅こばいハ因いんひひ。是のうへいをも。酒さけを求  
立たつめり。是の体からだと見うけて敵てきがうづぎり。期とき。是の四三鷹りゆうじろうハ袖そでが是の立たつ  
しを奈何なにうる。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。  
是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。  
も度たど。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。  
前まへお宿しゆく。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。  
今の難ひずのあどろき。逃のがや走はしひ。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。  
是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。是の立たつと腰こしと袖そで。



木子をきこてあらへて立上る。間のうちには高く「お入りなづく」入る  
腰骨あくもさげどもあくもさへと一首の歌うとほつて徐々立  
坐ひ後段のよみハ一ト間かく姿へ渡りきて八首後こそ小串  
の家臣唐琴浦をあらざりへ合意爲次郎どのみくありける食方  
ハ絶海とよび去る比大廟(渡玉)ありうり金無をば日本(もち  
渡玉)と浦を垂つざのあうゆきとく貞明公(献)ぐさひがそり亂  
じて、自らかくと養まへり縛をう千數万段の  
次第にえりだりて、全く商業の手所かれて、さすへる恨むべき  
災とくませても、全く商業の手所かれて、さすへる恨むべき  
ふもありず。かく本意をこぼる上は是よりて、ハ吉端のまづぐ  
べ。猶又寺四三房のまづは我志の土産あり。と云ひて云ひ

て賀の子のむすよりとあひて。賀佛の扇かひしき、こすりふ  
先達く子四三房がよきつけ殺(ごろ)野中の井戸(葬)にとけひ。  
小梅がす長吉有姿にて、賀のすちうり草あり。寺四三房(死)す  
もすのうげくふぞ。子四三房(死)ハ更ふ不審をまやす。爰を斗  
争ひ絶海禪院(せういん)すむししませ。我不慮(ふじゆ)あやまちをて、まに寝け  
殺せし長吉送言(よみ)すまうせ。世中の古井(くわい)埋葬せしよりのう夏よ  
て存余(まのと)あやや招魂(まほん)の法とやらん人をまごび生まむ。まご  
禪院(せういん)をまうて、まごの隆(たか)き死ふあやまち。まごのまく子四  
三房(さくわう)忠信(ちゆうしん)のゆううへ死みて。身負梅(みづめ)とゆく口被(くわき)

まことと以て字ともううめぬ。梅をとむじとく人よとく。まこと  
をとる事うながゆゑは草木いひとひど。彼の唐土羅浮山の梅ハ  
化して美人となり。又我が國ふくも彦相公の西垂樹ハ篠山へ飛べ例  
あり。このみう波神紀といへ書か。千歳入參へ小見みにくるす  
を裁せたり。又徒然草みへ土大根さへ船舟又喰へ。兵ときて敵  
と進あひぞけり。夏と書り。とまう皆怨情のとりども精の入  
て或ひ人と化して海山を越へて飛行せしろ。理外の理とは長  
吉が種生せしもまゝそひと。汝がおませて梅が身代りふ立つゆ。  
奈何とうまぐ貪ら。その頃日暮ゆれ辺りと眷縁せよ。或夜の夢す  
一箇の童子來り。我前よりびよづれ若く心字を夢の印響

伯父。清友とよぐ者ううが。年來恵みをうけ。人の親族過て余を  
落とす。我是をさくととらへど。こまく又前其の宿因え  
バ一旦彼人の身たり。されば。その業をもて難。かまば我竊よ  
彼の人の素形よ變じ。假よ手四脇どく。またううべ。四月の草  
野中の井戸の邊りへり。自らかづきふべと正くと見ゆる差  
真きの野中の井の邊りへり。長吉もあへり。うべ。こまくわら  
アと近づいて。向ふ長吉ハ足のむ地ふく。かくも覺へ。と宿る  
さてこそとまの一五一十を告かせ。即時芝磯村とあるとおひ  
しき。未復讐の時ひとぞ。長吉ととものひねん。お你木ま帰  
が太刀のさぬ。と車ひ。近ふ。湯を浴せざき。ば。うづく

羨こゑあるゆゑを由と長吉小波へあく。暫時<sup>ハ</sup>間緒共<sup>ハ</sup>ヌ迎<sup>ム</sup>と  
編愈<sup>ハ</sup>し今<sup>ハ</sup>骨の筋<sup>ハ</sup>が復讐<sup>ハ</sup>んむと<sup>ハ</sup>縁<sup>ハ</sup>て初見<sup>バ</sup>。巴<sup>ハ</sup>と貰<sup>ハ</sup>ひ中<sup>ハ</sup>  
長吉と蹠<sup>ハ</sup>しは所<sup>ハ</sup>被<sup>ハ</sup>りてきりと。猪<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>を波<sup>ハ</sup>くも。小梅亭<sup>ハ</sup>青<sup>ハ</sup>袖<sup>ハ</sup>  
冬<sup>ハ</sup>も禪<sup>ハ</sup>仰<sup>ハ</sup>が情<sup>ハ</sup>と感<sup>ハ</sup>ぐける

梅花春水卷之三終

